

## 経済の社会的制御をめぐる問題構成の転換 ——埋め込みから構造的カップリングへ

畑山 要介<sup>1</sup>

1. はじめに
2. T. パーソンズの「規範の内面化」論と A. シュッツによる批判
3. K. ポランニーの「内面的見通し」論と F. ハイエクの批判
4. 社会システム理論の転回
5. 埋め込みから構造的カップリングへ
6. まとめ

### 1. はじめに

#### (1) 背景と目的

市場経済という社会編成原理をいかに制御できるかという問題は、19 世紀以来の社会学のひとつの重要な関心であった。市場経済の効率性原理のもとで編成されることで生じる無規制状態を抑制するためには、経済は社会によって制御されなければならない。経済の社会への「埋め込み (embeddedness)」はいかにして可能かという問いは、社会学が経済を論じるための中心的な命題として位置してきた。

20 世紀において経済と社会の関係を論じた代表的な 2 人の論者、T. パーソンズと K. ポランニーはこの埋め込みのパラダイムを主導してきた。パーソンズは経済主体がいかにして規範を内面化しうるかを問い、ポランニーは生産と消費の協同はいかにして可能かを問うた。これらは、個々の自己利益 (self-interest) の追求を規制することで経済活動が社会規範に従うようなあり方を追求するものであった。その意味では経済の社会的制御はきわめて道徳的問題として構成されてきたと言える。

ところが、今日では自己利益の追求が自己利益の追求を制御するという新たな制御の仕組みが生じつつある。排出権取引、CSR 経営、社会的責任投資、社会的企業などは、必ずしも道徳的コミットメントを経由しなくとも、自己利益の追求の結果として自然環境や社会に配慮された経済活動が営まれるという側面を有している。企業による社会貢献は、付加価値の追求やリスク・マネジメントとして、もはや経済活動そのものとなりつつある<sup>2</sup>。

この「市場経済の自律的制御」は、埋め込みモデルにとってはパラドクスでしかない。このパラドクスを脱パラドクス化するためには、埋め込みモデルの理論的前提それ自体を相対化し、それとは異なる理論的前提から出発してこの制御のあり方を説明しなければならない<sup>3</sup>。本稿の目的は、社会学はいかなる方法をもって市場経済の自律的制御という問題

<sup>1</sup> 日本学術振興会特別研究員 PD

<sup>2</sup> この種の問題は経営学において「啓発された自己利益 (enlightened self-interest)」の問題として問われてきた。企業マネジメントへの CSR への組込みが経営戦略化してきた近年の動向に関しては P. コトラー (Kotler and Lee 2005=2007) や谷本 (2013) の研究を参照。

<sup>3</sup> この理論的前提への問いは「利己 vs 利他」、「私益 vs 公益」あるいは「利益追求 vs 社会貢献」という二項対立を問いに晒すことになる。A. スミス「共感」モデル (Smith 1759=2003) 以来、経済学ではこの種の問題は「意図せざる結果」の問題として問われ、19 世紀には C. メンガーによってこの種の問題は社会科学方法論の問題として再定式化された (Menger 1883=1986)。

を扱うことができるのかという問題を検討することである。この問題は4つの下位問題を含んでいる。(1)観察水準の区別をめぐる問題、(2)行為の意図せざる結果をめぐる問題、(3)社会的制御という言葉の意味をめぐる問題、そして(4)経済制御における道徳の再位置づけをめぐる問題である。本稿では、制御をめぐる学説史上の論争を整理するなかで、(1)、(2)、(3)の問題に対する視角を与え、(4)の問題に対するひとつの理解の道筋を与えていく。

## (2) 枠組み

本稿は、T.パーソンズの「規範の内面化」論に対するA.シュッツの批判、K.ポランニーの「内面的見通し」論に対するF.ハイエクの批判を検討し、これらの批判を社会システム理論における開放システムから閉鎖システムへのシフトという文脈のなかで理解を与える。

パーソンズとポランニーは、トップダウン式かボトムアップ式かの相違はあれども「行為者の主観性」と「観察者の主観性」を同一視することで、経済制御の問題を道徳的コミットメントの問題として構成したという点で共通している。シュッツは「一次構成概念」と「二次構成概念」の区別を通じて、パーソンズの規範の内面化による制御という図式を相対化する(第2節)。ハイエクは「人々の抱く見解」と「観察者が抱く見解」を区別することで、ポランニーの内面的見通しによる制御という図式を相対化する(第3節)。両者の批判は、制御の問題を「行為の意図せざる結果としての秩序形成」の問題へと移行させる。

シュッツとハイエクの批判は「ミクロ vs マクロ」あるいは「資本主義 vs 社会主義」といった図式で理解しきることはできない。両者の批判は、社会システム理論における「開放システム vs 閉鎖システム」という図式に乗せることで、その意義がより明確なものとなる。それにより、両者が批判に用いた区別を「観察水準の区別」の問題として理解することができ、その理解によって「行為の意図せざる結果としての秩序形成」の問題を「経済と社会の構造的カップリング」の問題として理解することができる(第4節)。

この経済と社会の構造的カップリングという視座において、経済にとっての社会はもはや「制御盤」ではなく「環境(攪乱)」にすぎず、経済はその環境を市場という内的環境として扱うことしかできないという結論が導かれる(第5節)。これは埋め込みの視座(開放システム理論)ではペシミスティックな結論であるが、構造的カップリングの視座(閉鎖システム理論)では、まさに経済システムは社会を市場という内的構成概念として扱うことができるがゆえに、ある特殊な条件下で道徳的問題を経済的に処理しうるのだと理解することができる。

---

社会学は、必ずしもこの「意図せざる結果」の問題を無視してきたわけではない。M.ウェーバーの「諒解」をめぐる議論(Weber 1913=1990)、およびそれに続く社会的秩序をめぐる議論(Weber [1921] 1972=1974)を、意図せざる結果としての秩序形成を社会学方法論的水準の問題として定式化する試みとして読むことができるならば、社会学は、利己の抑制への問いのみではなく、利己と利他の連関への問いをも問題設定として背負ってきたと言える。その意味では、自己利益追求を通じた経済の制御は非社会的なものではなく、きわめて社会的な分析対象である。そして、この対象を扱う方法こそが、本稿の問いである。

## 2. パーソنزの「規範の内面化」論とシュッツによる批判

経済の社会的制御をめぐる重要な理論的問題のひとつは、行為の主観的次元の取り扱いをめぐる問題にあった。パーソンズとシュッツの論争は、その方法論的基礎をめぐる論争として理解することができる。この論争におけるシュッツの批判は、結果的にパーソンズの制御モデルの前提としている問題構成それ自体を相対化することになる。

### (1) パーソンズの分析的リアリズム

パーソンズは、「分析的リアリズム」の立場から行為のモデルを構築した。分析的リアリズムとは、経験的な現象を抽象的概念によって理解することで、客観的な外的世界の諸側面を適切に把握することができるという認識論的立場である (Parsons 1937=1989: 138)。パーソンズはこの立場から、行為が「行為者」、「目的」、「状況」、「規範的志向」の4つの特性を含むという仮説的モデルを設定する。なかでも「規範的志向」は行為における主観的側面を捉えるものであり、それゆえパーソンズは自らの仮説的モデルを主観的観点に立つものであると考える。このモデルは行為者にとって「外的な過程」と行為者の「心のなかの実在的過程」を同時に含んでおり、それゆえ客観的・歴史的に記述される行為とは異なり「因果的な意味」を持っているとされる (Parsons 1937=1989: 166)。

したがって、パーソンズにおいて制御をめぐる問題は「規範の内面化」の問題として扱われる (Parsons 1951=1974)。そして、「行為の過程は体系内の行為者を拘束している」と見なされる合理的規範の実現という方向に進み、「努力というエネルギーは、行為過程においては目的の実現あるいは規範への同調へと転化される」ことになる。最終的に、制御の問題は「共通価値による統合はいかにして可能か」という道徳的コミットメントをめぐる問題として定式化されることになる (Parsons and Shils 1951=1960)。

しかし、このパーソンズの行為モデルは「行為者の主観性」と「観察者が客観的に論じる行為者の主観性」を混同しているという点から批判に晒されてきた。もっとも明快な批判を与えたのが A.シュッツである。

### (2) シュッツによる批判

シュッツによるパーソンズの批判の要点は、「行為者の心のなかの主観的事象を、観察者だけに接近できるその事象の解釈図式ととり違え、したがって主観的現象を解釈するための客観的図式とこの主観的現象それ自体とを混同してしまっている」 (Schutz-Parsons 1978=1980: 110) という点にあった。つまり、「行為者が思念した意味を、その行為の結果として観察される外的事象に対して観察者が解釈した意味で代替することはできない」 (Schütz 1932=2006: 59) ということである<sup>4</sup>。

シュッツは、主観的な意味構造を客観的知識の体系によって把握するため一次構成概念と二次構成概念を区別する (Schutz 1954=1983: 86-96)。一次構成概念とは社会的な場面にいる行為者が常識的な思考をもって構成する概念であり、二次構成概念とは一次構成概

<sup>4</sup> ただし、シュッツとパーソンズとの往復書簡 (Schutz-Parsons 1978=1980) では、シュッツの批判はパーソンズには理解されないまま議論はすれ違いに終わる。この両者の議論の応酬の分析に関しては森 (1995: 629-659) や那須 (1997: 112-145) の議論を参照。

念について社会学者が構成する概念である。社会科学とは、一次構成概念を社会学者の関心にしたがって解釈して二次構成概念を練り上げ、その二次構成概念を用いて社会現象に説明を与えるものである。

ところが、パーソンズは、行為者にとって「外的な過程」と行為者の「心のなかの実在的過程」を同時に含むモデルを構築した。これは、パーソンズが行為者の主観性を「規範的志向」という主観的カテゴリで代替することによって、行為者本人の立場からの理解と科学的構成概念を用いて構成された行為者の理解を同一視しているということの意味する。パーソンズの行為モデルにおいては、個人の目的に対する手段の選択は規範的価値に導かれるものであることが前提とされていたが、シュッツの批判を通じて、このモデルにはこのモデルをこのモデルの構築の結果として事後的に獲得されるはずの解釈図式を用いて構築するという矛盾が含まれていたことが明らかになる。

シュッツのパーソンズ批判は、秩序形成をめぐる問題構成の転換の要求、およびそれに伴う制御モデルの転換の要求を含むものとなる。たとえば、自動車の運転手が交通規則を守るといふとき、諸個人の様々な自分自身にとっての「固有の関心」が想定される。しかし、パーソンズにおいては、ルールを守る行為はもっぱら規範の内面化の問題として扱われるため、交通秩序の制御の問題は交通規則に対する道徳的コミットメントの問題に置き換えられる。しかし、シュッツに従うなら、この規範の内面化は交通規則を守るという行為を説明するモデルとして事後的に構成された二次構成概念にすぎず、それを行為者自身の固有の関心という一次構成概念に置き換えることはできない<sup>5</sup>。交通秩序は行為者の固有の関心の解釈から出発して構築されたモデルによって説明されなければならない。

行為者の固有の関心を出発点に構成されたモデルは、ある秩序の形成を意図しているわけではない諸個人によって当該秩序が形成される可能性を内に含むことになる。そして、ここにおいて「ルールに従うこと」と「規範的価値にコミットすること」は分析上区別される<sup>6</sup>。この区別は、制御の問題を道徳的な動機づけという図式から解放する。つまり、共通の規範的価値に諸個人の関心が方向付けられるがゆえに人は社会的ルールを守っているわけではなく、諸個人はそれぞれ固有の関心に基づきながらそれぞれ固有の仕方**で社会的ルールを守っている**ということになる。一次構成概念と二次構成概念の区別は、制御の問題を、規範の内面化をめぐる問題としてではなく、諸個人の固有の関心と社会的ルールの関連をめぐる問題として再定式化することになる。

### 3. ポランニーの「内面的見通し」論とハイエクの批判

K.ポランニーは、T.パーソンズと同様に、社会を経済の制御盤として捉えていた。ただ

---

<sup>5</sup> 固有の関心である一次構成概念としての動機を「目的動機」として、事後的に構成された二次構成概念としての動機を「理由動機」として区別することができる。ルールに従うことを規範的価値へのコミットメントの問題として説明するパーソンズの行為モデルは目的動機と理由動機を混同したものだと言える。

<sup>6</sup> たとえ、行為の動機が規範的価値へのコミットメントであると行為者自身が自認していたとしても、それは行為者本人が観察者として事後的に解釈したものである。一次構成概念と二次構成概念は分析上区別される。

し、パーソンズのモデルは社会規範が経済主体の内面を制御する「トップダウン式」だとすれば、ポランニーのモデルは個人間の相互理解を通じて経済全体を形成する「ボトムアップ式」だという点で異なる。F.ハイエクの新古典派経済学に対する方法論的批判は、このポランニーの制御モデルに対する批判を含むものとして理解することができる。ハイエクの批判は、トップダウン式であれボトムアップ式であれ、行為の分析と社会の分析を連続的に捉えることはできないという点にあった。この批判は、経済の制御にあたっての市場の位置づけの再考を要求するものとなる。

### (1) ポランニーの社会的経済

ポランニーの「社会的経済」のモデルは、協同組合を中心とした経済制御メカニズムの形成、および協定を通じた価格形成の仕組みの形成に大きな影響を与えてきた。ポランニーは、交換原理のみに支配された自己調整的市場による社会編成の問題を指摘し、互惠と再分配の原理によって「経済を社会に埋め込む」ことで人間の経済を取り戻さねばならないと考える (Polanyi 1944=1975)。この社会的経済モデルは、同質的な人々で構成される部族社会ではなく、異質な諸個人で構成される機能的社会におけるモデルである。

機能的社会とは、「統制価格」でも「市場価格」ではなく生産団体と消費団体の間で取り決められた「協定価格」によって経済活動が営まれる「経済が社会に埋め込まれた」社会である (Polanyi 1922: 397-402)。協定価格は 2 つの組織の均衡によって成り立ち、その均衡はそれぞれの下位組織、そして下位組織を構成する諸個人の均衡で成り立っている。そしてこの諸個人間の均衡は「個々人内部における作用と同様」であり、「諸個人の異なった利害間の闘争は、個人の内部の種々の要求が実際にそうであるように、その均衡点を見出す」と考えられている (Polanyi 1924=2003: 147)。この均衡の条件が「内面的見通しの確実性」である。「内面的見通し」とは「他者の心のなかにある欲求や苦勞を知る」ことであり、それは「思考のなかで自分を彼の立場におき、彼の欲求、彼の苦勞をともに体験し、共感すること、そしてこの欲求と苦勞に内面的に入り込むこと」によって初めて可能となる (Polanyi 1925=2012: 7)。ポランニーにおいて経済の制御、特に価格形成をめぐる根本的な問いは、異質な諸個人間の内面的見通しの一致はいかにして可能かという問いであり、それを可能にするのが協同組合組織であり協定であった。

このポランニーの理論は L.ミーゼス (Mises 1924) によって批判されたが、議論はすれ違いに終わる<sup>7</sup>。この批判の含意がより明確になるのは、社会主義経済計算論争における F.ハイエクの新古典派経済学批判のなかにおいてであった。

### (2) ハイエクの批判

ハイエクの社会主義経済計算論争における新古典派経済学批判は、ポランニーの問題設定に対する本質的な指摘を含むものとして理解することができる<sup>8</sup>。この論争におけるハイ

<sup>7</sup> ポランニーとミーゼスの間の論争の背景には、オーストリア社会主義をめぐる一連の政治的論争があった。オーストリア社会主義とポランニーの関連についてはポランニー=レヴィットら (Polanyi·Levit and Mendell 1987) を参照。

<sup>8</sup> 社会主義経済計算論争は、計画経済の価格決定の可能性をめぐるオーストリア学派経済学と新古典派経済学との間の論争である。論争の詳細は D.ラヴォア (Lavoie 1981=1998) を参照。ポ

エクの方法論的出発点は、社会科学の対象とする「事実」とは人々によって選定・解釈された「事実」だという点にある (Hayek 1943=2008: 85)。それゆえ、社会科学は自然科学とは異なり「人々の抱く見解」と「観察者が抱く見解」を区別する必要がある (Hayek 1952=2011: 38)。

この方法論的区別は、個人の均衡と社会の均衡の連続性というポランニーの前提を相対化する。均衡概念は「ある個人の行為の分析」に関しては明瞭な意味を持つが、それをそのまま「社会の分析」に用いることはできない。なぜならば、行為から社会へと議論の水準が変わるとき、均衡という概念の持つ意味も変わってしまうからである。つまり、行為における均衡とは行為者の与件の不変性を意味し、社会の均衡とは諸個人間の与件の一致を意味するが、行為の分析から社会の分析に移行するにあたって与件という概念が「人々の抱く見解」から「観察者が抱く見解」へとその意味がすり替わっている、ということである (Hayek 1937=2008)。

そうすると、「個人内」の内面的見通しと「個人間」の内面的見通しは別種の問題とならざるをえない。個人間の内面的見通しの一致をめぐる問題は、個人間の事実に対する解釈の一致をめぐる問題となるが、そのような一致それ自体が観察者の解釈であるゆえに「事後的」なものとなる。内面的見通しの一致を均衡に先駆けた条件に据えるモデルは、モデルの構築の結果として事後的に獲得されるはずの解釈図式を用いて構築するという矛盾が含まれているということになる。

重要なのは、ハイエクにおいても「他者の心のなかにある欲求や苦勞を知る」という「内面的見通し」は経済の制御の必要条件であったという点である。ただし、ハイエクにおいて内面的見通しは一致可能性の問題ではなく、他者の行動や期待に対する推測可能性の問題であった。この推測は、他者の行動や期待に関する一般的ルールを知ることによって可能となるが、このような一般的ルールは慣習に属するものであるがゆえにポランニーの言うような協定においては取り決めることはできない。そこでハイエクは、ポランニーとは異なり、市場価格による経済制御をモデル化する<sup>9</sup>。なぜなら、市場価格こそが経済において他者の「内面的見通し」に関する知識を伝達するシグナルだからである<sup>10</sup>。

ハイエクは経済が制御不可能だと考えているわけではなく、経済を制御できるのは市場のみだと考えている。そして、この市場経済による市場経済の自律的制御を、非社会的な制御としてではなくきわめて社会的な制御としてみなしている。この制御モデルにおいて社会はもはや制御盤ではなく経済を取り巻く「環境」にすぎないが、しかし社会に分散した内面的見通しに関する知識が経済にとって必要なのだとすれば、経済はまさしくその自

---

ランニーの機能的社会モデルも新古典派への批判であったが、ハイエクの新古典派批判はポランニーのモデルに対する批判も含む。この「ねじれ」の問題については畑山 (2016) を参照。

<sup>9</sup> 社会主義経済論争におけるハイエクの主張をより正確に言えば、統制価格であろうと協定価格であろうとも、それが人々の欲求や苦勞という分散された知識を含むのであれば、その価格は結果的に市場価格としてモデル化されるものと同様にならざるをえないということである。

<sup>10</sup> 「観察者が抱く見解」ではなく「人々の抱く見解」から出発するならば、市場価格は需要と供給の均衡によって形成されるものではなく、競争者間の観察と予測を通じた複雑な情報伝達プロセスによって形成されるものとなる (Hayek 1845=2008)。このように形成された価格は、人々が行動選択に際して他者の期待の指標として利用可能である。市場価格に対するこの種の理解は、社会学でも H.ホワイト (White 1981) などによって論じられてきた。

らの環境に依存するということになるからである。

ハイエクのポランニーに対する批判の要点は、人々の抱く見解と観察者が抱く見解を区別することで内面的見通しという言葉の意味が変わるということ、この意味が変わることによって経済の社会的制御は「市場による経済の制御」という自律的制御モデルのなかで問われるということである<sup>11</sup>。

#### 4. 社会システム理論の転回

シュッツの批判は、制御の問題を行為と秩序の関連をめぐる問題として再定式化し、ハイエクの批判は経済の社会的制御を市場による自律的制御の問題として再定式化する<sup>12</sup>。以下では、社会システム理論における開放システム理論から閉鎖システム理論へのパラダイム・シフトという文脈のなかで両者の批判に理解を与えることで、経済と社会の関係をめぐる基本的な問題構成の転換について検討を加えていく。

##### (1) 開放システム理論としての埋め込みモデル

パーソンズとポランニーは、トップダウン式かボトムアップ式かの相違はあれども、経済の社会的制御をめぐる問題を経済の社会への埋め込みの問題として、すなわち社会・他者への道徳的コミットメントによる個々の自己利益の追求の規制の問題として定式化した。その前提には、**複数のパースペクティブがその相互作用を通じて均衡に近づいていく過程を社会の条件とみなすという共通した考え方**があった。この考え方は、パーソンズとポランニーのみではなく、20 世紀中頃に広く普及したパラダイムであった。システム理論の領域では、開放システムの制御モデルのなかにかような考え方を見ることができる。

システム理論は、諸要素の相互連関によって形成されるまとまりを「システム」、その外部を「環境」として捉え、システムの自己維持や、システム間の相互作用、環境への適応を問題とする一般性に指向した科学理論である。L.ベルタランフィによれば、システムは外部環境や他のシステムに「開かれる」ことによってフィードバックを獲得し、それによって自らの構造を維持することができる (Bertalanffy 1971=1973)。フィードバックとは、システムと環境の間、あるいはシステムとシステムの間での「インプット/アウトプット」を通じて諸要素が交換されることであり、これによってシステムは制御される。この相互作用をインプット/アウトプット図式で捉える理論は、開放システム理論と呼ばれる。

社会学に開放システム理論の考え方を導入したのは T.パーソンズと N.スメルサーであっ

---

<sup>11</sup> 社会学でも M.グラノヴェッターが、市場は社会的に「埋め込まれている」と論じたことは広く知られている (Granovetter 1985)。彼は、ハイエクと同様に市場の社会的性格をよく捉えていたが、好意や信頼、慣行を経済の「構成要素」として考えていた。その意味では、それらの社会的要素を経済の「環境」として捉えるハイエクや次節で論じる閉鎖システム理論とは異なる。グラノヴェッターの関心がミクロ水準とマクロ水準の接合にあったという意味では、彼の理論は開放システム理論の発想に基づいている。彼の目指そうとしたモデルそれ自体は、閉鎖システムの考え方に近かったのかもしれない。ただ、モデル化のために使用した道具が開放システム理論の図式であった。結果として、彼の分析は根本的な理論転換というよりも、埋め込み概念の「延命」となった、と考えられる。

<sup>12</sup> シュッツの方法論とハイエクの方法論の詳細な比較は橋本 (1995) を参照。

た (Parsons and Smelser 1956=1958)。経済は政治・文化・社会と並ぶ全体社会システムの部分システムのひとつとされる。4つの部分システムは他の部分システムとのインプット／アウトプットによって互いに「制御」される。この制御を通じて、部分システムは他の部分システムに対して、あるいは全体社会システムに対して「貢献」することになる。経済の制御のためには、経済活動が経済的な動機づけのみに基づいてはならず、他の部分システムの諸要素、特に社会規範がインプットされなくてはならない。パーソンズにとって、このインプットの局面こそが内面化であり、経済が社会的に制御されるということは「道徳規範を内面化した経済活動が営まれる」ことと同義であった。また、ポランニーにとって、生産と消費の間の相互理解の局面こそが協定であり、複数の個人間の内面的見通しの確実性が高まることで、互いに配慮し合えた経済活動が営まれると考えられた。

開放システム理論の社会的制御モデルでは、**個人間ないしはシステム間の相互理解の問題が「正確な写し取り」の度合いの問題として構成されている**。ポランニーとパーソンズにおいては、この「正確な写し取り」がより確実かつ透明になされることが経済の制御の条件だと考えられたわけである。

## (2) オートポイエティック・システムとしての経済

開放システム理論を相対化する上で決定的に重要なのは、理解には総じて「解釈」が含まれているという点である。H.G.ガダマーは、解釈という過程は必ずしも「正確な写し取り」ではなく、解釈する側のパースペクティブに依存すると論じる。これは、完全な理解が不可能であるということではなく、完全性というものがそもそも解釈者によって先行把握されているということ、つまり、解釈者は予めその事柄に対して自らが持つ関連性から汲み取られた意味期待に基づいて理解するのであって、その関連性のなかで理解が自己完結していることを意味する (Gadamer 1960=2008: 461)。ガダマーの考察は、理解を「メッセージの伝達の確かさの度合い」の問題として捉える考え方を根本から転換させる。なぜなら、理解とは常に自己に関連付けられた理解であり、それは理解する側の関心に従って作り上げられた構成概念だということになるからである。解釈に関するガダマーの考察は、開放システム理論の前提を揺るがす。というのも、システムは環境をシステム自身の固有の仕方においてのみ理解している、さらには環境なるものそれ自体がシステム自身の固有の産物だということになるからである。

システム理論において、この種の考察は、システムの自己完結性を前提とする閉鎖システム理論への移行を要求する。システムが閉鎖しているということは、システムの自己維持や変化が、システムのなかで自己完結していることを意味するが、それはシステムが環境から影響を受けないということではない。H.マトゥラーナと F.ヴァレラは、システム閉鎖性を「作動上の閉鎖」、つまりシステムの構成要素が構成要素そのものを産出する作動のみでシステムが完結していることであると定式化する (Maturana and Varela 1980=1991)。

この作動上の閉鎖において、システムと環境はもはや開放システムで言うところのインプット／アウトプットの関係にはない。作動上閉鎖したシステムにとって環境との相互作用は「攪乱」であり、何がシステムにとっての環境として定義されるかは当該システムの



構造が決定することになる<sup>13</sup>。このシステム自身の構造によって決定された環境との組み合わせによって、システムは自己を様々な形に再生産する。逆に言えば、システムは環境との差異においてはじめて自己を再生産することが可能だということでもある。これは、環境がシステム自身の固有の産物であると同時に、そのシステム自身の再生産がまさにその自らの産物である環境に依存するということを意味する。マトゥラーナとヴァレラは、この自己創出＝自己制御のあり方を「オートポイエーシス」と呼ぶ。このシステムは、作動上閉鎖されているため、環境とコミュニケーションすることはできない。環境とシステムは互いに状態変化を引き起こしながら、攪乱をもたらす相手として振る舞うことになる。このプロセスは「構造的カップリング」と呼ばれる (Maturana and Varela 1984=1997: 86)。

オートポイエーシスの考え方を社会学に導入したのは N.ルーマンであった。ルーマンは、システムと環境の差異それ自体がシステムの作動の相関物であるとするならば、もはやインプット／アウトプット図式を経済と社会の関係に適用できないとする (Luhmann 1984=1993)。ルーマンは経済を、貨幣を媒介とする支払いの連鎖によって作動上閉じられたシステムとして記述したが、それは経済が環境の影響を受けないということではなかった。経済は自らの関連性においてでしか環境を把握できないが、経済はまさしくその自らの関連性において把握された内的環境を用いて自らを再生産するということであった (Luhmann 1988=1991)<sup>14</sup>。経済と社会は互いに攪乱をもたらす環境であり、両者の関連は構造的カップリングの問題として把握されることになる。

経済が自身の固有の区別を用いて構成した内的環境によって経済が条件づけられる、という観点は制御の問題を自己制御の問題へと転換させる。この転換を踏まえるならば、「経済が社会的に制御される」という言葉の意味は、開放システム理論のそれとは異なってくる。

## 5. 埋め込みから構造的カップリングへ

### (1) 観察水準の区別と制御をめぐる問題構成の転換

開放システム理論において経済を社会的に制御するということは、社会規範を経済にインプットすることであり、規範的行動原理によって個人的な動機や欲求に規制を与えるということであった。この開放システム理論の図式に対して、オートポイエーシス理論 (閉鎖システム理論) は根本的な転換を迫ることになる。

第 1 に、観察水準の区別である。オートポイエーシス理論が導く重要な帰結は、あらゆる

---

<sup>13</sup> 「攪乱」(perturbation) は生物学に由来する概念であり、環境の影響による生体の構造変化が、攪乱される側の構造によって決定されることを意味している。これは、情報理論において環境を「ノイズ (雑音)」として捉える考え方 (Shannon and Weaver 1949=2009) に近い。ノイズ概念によって、情報の伝達は受信側の「選択」の問題として再定式化される。この選択は、蓄積されたコミュニケーションの「過程」に依存するとされる (エルゴード過程)。これは、まさしく環境定義がシステムの構造に依存するということにはかならない。こうして、閉鎖システム理論では、環境によるシステムへの影響は「ノイズによる攪乱」として定式化される。

<sup>14</sup> 支払いが希少性に基づくという意味では経済は作動上閉鎖しているが、希少性それ自体は社会的コンテクストに依存している (すなわち、社会が異なれば、同じ財でも希少価値は異なるということ)。経済は、希少性の観点から物事を扱うことによって、社会を「間接的」に、そしてそれゆえ「選択的」に扱うことになる。

るシステムが「観察するシステム」だということである (Foerster [1981] 1984)。観察は、自らの区別を用いた指し示しであり、システム自身の作動である。それは観察それ自体が観察されるということを含んでいる。ここにおいて、「ファーストオーダーの観察」(システムの観察)と「セカンドオーダーの観察」(システムを観察するシステムの観察)が区別される<sup>15</sup>。開放システム理論は、システムが観察に使用している固有の区別をシステムの作動に先駆けて設定することで、ファーストオーダーの観察とセカンドオーダーの観察を混同してしまっていることになる。シュッツとハイエクにおいて問題されていた区別をこの観察水準の区別として理解するならば、両者の批判を閉鎖システム理論による開放システム理論への批判として理解することができる<sup>16</sup>。

第2にこの観察水準の区別に伴って制御をめぐる問題構成が転換せざるをえないということである。制御は、「区別を当の区別によって指し示される差異の極小化のために設けるような作動」となり、インプットと呼ばれていたものは「システム自体の中で構成された情報に過ぎず、この情報構成は当のシステムがその差異の極小化に努める区別を作り上げている一成分」でしかないということになる (Luhmann 1988=1991: 342)。開放システム理論では、「制御」と「貢献」はインプット/アウトプットという同じ現象の両側面として処理され、それゆえ、パーソンズにしてもポランニーにしても経済の制御の問題は社会や他者への貢献の問題として扱われた。しかし、制御概念の転換によって、制御と貢献は異なる観察水準の問題として切り離される。この切り離しによって、開放システム理論が制御という言葉で問題にしていたものが、結局は「経済システムにとっては経済の自己再生産=自己制御に過ぎないが、社会システムにとっては社会への貢献であるような事態」であったということがわかってくる。

## (2) 経済システムの環境としての社会

たとえば、二酸化炭素の削減を指向する経済について、それを経済システムの固有の観察にもとづく自己再生産=自己制御として説明すると次のようになる。すなわち、「経済システムが二酸化炭素の排出を控えるのは、二酸化炭素の排出抑制それ自体が経済システムにとって希少価値があるからである、あるいは排出それ自体が経済システムにとって経済的リスクだからだ」という説明である。この説明は「社会への貢献」という社会の側の観察から区別されているが、この経済固有の観察から出発することで経済の観察と社会の観察を区別した形で問題を構成することができる。すなわち「経済システムは自らの自己再生産をおこなっているだけであるにもかかわらず、なぜその作動が結果として社会に貢献するものとなるのか」という問題構成である。この問題構成は、経済システムの固有の観察への問い、すなわち、経済システム内部で二酸化炭素の排出抑制が希少価値として、あるいは排出がリスクとして認識される関連性の構造についての問いを開く。

たとえば、「企業は社会的評判が自らの経済的利害関心を左右すると認識しており、その

---

<sup>15</sup> G.スペンサー=ブラウンの区別を参照 (Spencer-Brown 1969=1987) なお、構造的カップリングとセカンドオーダーの観察の関連については赤堀 (1997) を参照。

<sup>16</sup> シュッツとハイエクは行為者と観察者の区別を論じた。これを観察水準の層の区別として理解することで、「行為者→1次観察者」「観察者→2次観察者」と理解することができる。1次と2次は相対的な関係であり、行為者/観察者の関係をより一般化した区別ということになる。

関心のもとで二酸化炭素の排出を控える」という補助仮説はその問いに対応するひとつの説明を与えてくれる。つまり、経済システムは、社会システムから見れば「社会的問題」として観察されるものを、経済システム自身の関連性の構造に従って「経済的問題」として観察し、その自らの固有の利害関心に従った経済システムの自己再生産が、社会システムの側からはあたかも社会への「貢献」であるかのように観察されるということである。これは、経済システムが社会システムと特殊な条件下で「構造的にカップリング」しているということの意味している。

経済システムをオートポイエティック・システムとして捉えるならば、経済が社会的に制御されるということは、社会システムから経済システムに道德規範がインプットされるということではなく、経済システムが社会システムと構造的にカップリングするということである。これは経済が社会を自らの環境として思い描きながら作動するということであり、決して経済が社会のために作動するということではない。オートポイエティック・システムとしての経済システムにとって、社会システムは自身の構成要素ではなく「攪乱」に過ぎない。これは道德規範が経済にとって不要だということではなく、まさにそれが経済システムの環境を構成しているということ、つまりシステムが自らの構成要素で自己再生産をおこなっていく上での構造的条件を構成しているということの意味している。むしろ、作動上閉鎖した経済システムは道德規範をそのまま直接には扱えないので、それを「ニーズ」あるいは「リスク」という経済の構成要素として処理することになる。つまり、経済システムが配慮しているのは社会システムではなく、あくまで経済の自己再生産なのではあるが、経済と社会が特殊な条件下で構造的にカップリングすることで、経済の自己再生産＝利害関心の追求のなかに社会への配慮が織り込まれることになるわけである<sup>17</sup>。

以上の考察を通じてわかるのは、経済の自己制御モデルにおいて、道德はもはや経済システムの構成要素ではなく「ノイズによる攪乱」として再位置づけされるということである。経済の社会的制御はいまや環境との構造的カップリングの条件への問い、すなわち道德的問題がニーズあるいはリスクという経済にとって意味あるものとして認識されることはいかなる条件のもとで可能となっているかという問いに置き換えられることになる。

## 6. まとめ

本稿ではシュッツの批判とハイエクの批判を「行為者の主観性と観察者の主観性の区別」という観点で整理することから出発し、それらが制御をめぐる問題を「行為の意図せざる結果としての秩序形成」の問題に転換させるという理解を与えた。本稿の後半では、システム論のパラダイム・シフトという文脈のなかで理解することで、その種の秩序形成の問題を経済と社会の構造的カップリングの条件の問題として問うことができるという理解を与えた。経済にとって社会はもはや制御盤ではなく環境にすぎないが、それは道德規範が経済システムの再生産のための条件を構成しているということの意味している。

<sup>17</sup> 「利他的行動はグループを内包している環境世界における、構造的カップリングの結果として生まれる。それは『利他的に』利己的なのであり、『利己的に』利他的なのだ (Maturana and Varela 1984=1997: 236)。オートポイエシス理論におけるこの「利己的利他」の命題が、経済の社会的制御にも適用されるということになる。

以上の分析は「社会学はいかなる方法をもって市場経済の自律的制御という問題を扱うことができるのか」という問題に対する一定の見通しを与える。すなわち、**行為の動機づけへの問いではなく構造的カップリングの条件への問いへという問題構成の転換によって市場経済の自己制御を扱うことが可能となる**。これは、社会学が自然や社会への配慮のビジネス化・商業化という現象を社会学の対象として扱うことができるということを意味する。それは、道徳的問題をニーズあるいはリスクとして認識させ、道徳的配慮を経済活動そのものに変換するような制度のあり方を問うような研究の可能性を開く<sup>18</sup>。たとえば、倫理的消費や社会的観点からの企業選択、さらには CSR 評価制度や生産・取引過程に対する認証・監査制度などは、経済システムが社会と特殊な形でカップリングする条件を構成している。こうした条件下で、経済システムに社会的配慮が内部化され、自然や社会に配慮すること自体が経済合理的な「投資」となる。コンプライアンスは、いまや自己利益の追求を抑制する行動ではなく、長期的利益を追求する行動として理解される<sup>19</sup>。

むろん、経済制御モデルのこの転換は「道徳的動機づけなき経済の社会的制御それ自体ははたして道徳的なのか」という問題を生じさせる。本稿の考察結果は、この問いの前提を相対化することになる。この命題に出てくる2つの「道徳的」という言葉は、もはや同じ水準にはないからである。「個人が道徳的である」ということと「経済が道徳的である」ということは、もはや観察水準が異なっている。それでも、道徳的な動機づけを経済の社会的制御をめぐる唯一の道だとするならば、個人内の均衡と個人間の均衡の連続性を要求する方法へと引き戻し、固有の関心に従った自由選択に基づく公共社会の形成をめぐる方法への道を閉ざすことになってしまうのではないだろうか。

## 参考文献

- 赤堀三郎, 1997, 「構造的カップリングとセカンド・オーダーの観察——いかにして社会システムを『観察』するか」『ソシオロギス』21: 132-148.
- Bertalanffy, Ludwig, 1971, *General System Theory: Foundations, Development, Applications*, London: Allen Lane. (=1973, 長野敬・太田邦昌訳『一般システム理論——その基礎・発展・応用』みすず書房.)
- Foerster, Heinz Von, [1981] 1984, *Observing Systems (2nd ed)*, Seaside, Calif.: Intersystems Publications.
- Gadamer, Hans-Georg, 1960, *Wahrheit und Methode: Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, Tübingen: J.C.B Mohr. (=2008, 響田收・巻田悦郎訳『真理と方法2』法政大学出版局.)
- Granovetter, Mark, 1985, “Economic Action and Social Structure: The Problem of

---

<sup>18</sup> 市場による制御は、経済学では「外部性の内部化」の問題として扱われてきた。市場の失敗とされてきた自然や社会をめぐる問題が、ニーズやリスクという観点から市場化されることでそれらに配慮された経済が創出されるという考え方である。ハイエクの理論は既にこの分野の理論的基礎づけに応用されつつある(楠 2010)。社会学からすれば、外部性の内部化は経済システムが社会と特殊な条件下でカップリングすることで可能となっているという考察が与えられる。この条件への問いこそが、この問題領域における社会学の固有の問題設定となりうる。

<sup>19</sup> 自己利益は、「短期的利益」と「長期的利益」に区別されるにいたる。自己利益による自己利益の制御というパラドクスは、長期的利益の促進という命題によって脱パラドクス化される。

- Embeddedness”, *The American Journal of Sociology*, 91 (3): 481-510.
- 橋本努, 1995, 「A.シュッツの方法論に関する批判的考察——オーストリア学派との関係から」『社会学評論』46(2): 144-157.
- 畑山要介, 2016, 『倫理的市場の経済社会学——自生的秩序とフェアトレード』学文社.
- Hayek, Friedrich A., 1937, “Economics and Knowledge,” *Economica*, 4(13): 33-54. (= 2008, 嘉治元郎・嘉治佐代訳「経済学と知識」『個人主義と経済秩序』春秋社, 49-80.)
- , 1943, “The Fact of the Social Sciences,” *Ethics* 54(1): 1-13. (= 2008, 嘉治元郎・嘉治佐代訳「社会科学にとっての事実」『個人主義と経済秩序』春秋社, 81-107.)
- , 1945, “*The Use of Knowledge in Society*,” *American Economic Review*, 35(4), 519-530. (= 2008, 嘉治元郎・嘉治佐代訳「社会における知識の利用」『個人主義と経済秩序』春秋社, 109-128.)
- , 1952, *Counter-Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason*, Glencoe, Ill.: Free Press. (= 2011, 渡辺幹雄訳『科学による反革命』春秋社.)
- Kotler, Philip and Nancy Lee, 2005, *Corporate Social Responsibility: Doing Most Good for Your Company and Your Cause*, Hoboken, N.J.: Wiley. (= 2007, 恩藏直人監訳『社会的責任のマーケティング——「事業の成功」と「CSR」を両立する』東洋経済新報社.)
- 楠茂樹, 2010, 『ハイエク主義の「企業の社会的責任」論』勁草書房.
- Lavoie, Don, 1981, “A Critique of the Standard Account of the Socialist Calculation Debate,” *The Journal of Libertarian Studies*, 5(1): 41-87. (= 1998, 日向健訳「社会主義経済計算論争の標準的解釈への批判」『経営情報学論集』4: 161-198.)
- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme: Grundriss einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1993, 佐藤勉監訳『社会システム理論』恒星社厚生閣.)
- , 1988, *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1991, 春日淳一訳『社会の経済』文真堂.)
- Maturana, Humberto R., and Francisco J. Varela, 1980, *Autopoiesis and Cognition: the Realization of the Living*, Dordrecht, Holland: Boston: D. Reidel Pub. Co. (= 1991, 河本英夫訳『オートポイエーシス——生命システムとはなにか』国文社.)
- , 1984, *El árbol del conocimiento: las bases biológicas del entendimiento humano*, Santiago de Chile: Editorial Universitaria. (= 1997, 管啓次郎訳『知恵の樹——生きている世界はどのようにして生まれるのか』筑摩書房.)
- Menger, Carl, 1883, “Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der politischen Ökonomie insbesondere” *Gesammelte Werke*, Tübingen: J.C.B. Mohr. (= 1986, 福井考治・吉田昇三訳『経済学の方法』日本経済評論社.)
- Mises, Ludwig, 1924, “Neue Beiträge zum Problem der sozialistischen Wirtschaftsrechnung,” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 51: 488-500.
- 森元孝, 1995, 『アルフレート・シュッツのウィーン——社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』新評論.
- 那須壽, 1997, 『現象学的社会学への道——開かれた地平を求めて』恒星社厚生閣.
- Parsons, Talcott, 1937, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, New York: McGraw-Hill. (= 1989, 稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造』(第5冊分) 木鐸社.)
- , 1951, *The Social System*, The Free Press. (= 1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- Parsons, Talcott and Edward A. Shils, 1951, *Toward a General Theory of Action*, Cambridge: Harvard University Press. (= 1960, 永井道雄・作田啓一・橋本真訳『行為

- の総合理論を目指して』日本評論新社.)
- Parsons, Talcott and Neil J. Smelser, 1956, *Economy and Society: a Study in the Integration of Economic and Social Theory*, London: Routledge and Paul. (=1958, 富永健一訳『経済と社会 I・II』岩波書店.)
- Polanyi, Karl, 1922, "Sozialistisch Rechnungslegung," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 49: 377-420.
- , 1924, "Die funktionelle Theorie der Gesellschaft und das Problem der sozialistischer Rechnungslegungen," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 52: 218-228. (=2003, 長尾史郎訳「機能的社會理論と社會主義の計算問題」『経済の文明史』筑摩書房, 141-166.)
- , 1925, "Neue Erwägungen zu unserer Theorie und Praxis," *Der Kampf. Sozialdemokratische Monatsschrift*, Wien: Sozialdemokratische Partei Österreichs. (=2012, 若森みどり・植村邦彦・若森章孝編訳「われわれの理論と実践についての新たな検討」『市場社会と人間の自由——社会哲学論選』大月書店, 3-19.)
- , 1977, *The Livelihood of Man*, New York: Academic Press. (=1980, 玉野井芳郎・栗本慎一郎訳『人間の経済 I——市場社会の虚構性』岩波書店.)
- Polanyi-Levitt, Kari and Marguerite Mendell, 1987, "Karl Polanyi: His Life and Times," *Studies in Political Economy*, 22: 7-39.
- Schütz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Wien: J.Springer. (=2006, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成——理解社会学入門』木鐸社.)
- Schutz, Alfred, 1954, "Concept and Theory Formation in the Social Sciences," *Journal of Philosophy*, 51: 257-274. (=1983, 松井清・久保田芳廣訳「社会科学における概念構成と理論構成」『アルフレッド・シュッツ著作集 1』社会評論社, 109-133.)
- Schutz, Alfred and Talcott Parsons, 1978, *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Bloomington: Indiana University Press. (=1980, 佐藤嘉一訳『社会理論の構成——社会的行為の理論をめぐって A.シュッツ=T. パーソンズ往復書簡』木鐸社.)
- Shannon, Claude E. and Warren Weaver, 1949, *The Mathematical Theory of Communication*, Urbana: University of Illinois Press. (=2009, 植松友彦訳『通信の数学的理論』筑摩書房.)
- Smith, Adam, 1759, *The Theory of Moral Sentiments*, London: A. Millar, A. Kincaid, and J. Bell. (=2003, 水田洋訳『道徳感情論 (上) (下)』岩波書店.)
- Spencer-Brown, George, 1969, *Laws of Form*, London: George Allen and Unwin Ltd. (=1987, 山口昌哉監修, 大澤真幸・宮台真司訳『形式の法則』朝日出版社.)
- 谷本寛治, 2013, 『責任ある競争力——CSRを問い直す』NTT出版.
- Weber, Max, 1913, "Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie," *Logos. Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur*, 3: 253-294. (=1990, 海老原明夫・中野敏夫訳『理解社会学のカテゴリー』未来社.)
- , [1921] 1972, "Die Wirtschaft und die gesellschaftlichen Ordnungen," *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J.C.B Mohr, 181-198. (=1974, 世良晃志郎訳「経済と社会的諸秩序」『法社会学』創文社.)
- White, Harrison, 1981, "Where Do Markets Come From?" *American Journal of Sociology*, 87(3): 517-547.